The Japanese Society for Temporomandibular Joint
一般社団法人 日本顎関節学会

News Letter No. 4
（2017 年 11 月 14 日発行）

理事長　古谷野　潔
社会連携・広報委員会委員長　玉勝　勝司

News Letter　No. 4

第 5 回アジア顎関節学会参加報告記

理事・渉外委員長　村上賢一郎

10 月 14,15 日に第 5 回アジア顎関節学会がソウルで開催された。私自身は 17 年振りの訪韓で、前回は 3rd International Conference on Temporomandibular Disorders and Orofacial Pain で日本からも多くの参加があったのを記憶している。当時はソウルオリンピック前で新空港と地下鉄工事が進んでいたが、現在ソウルに入るには、仁川（インチョン）国際空港が郊外に完成し、専用の高速鉄道線で市内中心部には 20 分足らずで到着できるとのことであった。今回は金浦空港へのフライトを取ったが、空港施設もリノベーションされ、随分近代的で美しいゲートウェイになっていた。

さて 14 日の夕刻から、ソウル中心部の小高い丘陵地にあって漢江と市街を見下ろせる高級ホテル グランドハイアットで韓国、日本、中国（今回は欠席）、フィリピンによる学会幹事会が開かれた。次回の第 6 回アジア顎関節学会を日本で行うことが確認され（2019 年 7 月 27-28 日、東京. 第 32 回日本顎関節学会総会・学術大会と共催）、次いで眺めの良い宴会場で会長招宴が開催された。食事はフレンチで美味、韓国伝統音楽の演奏もなされ大変に優雅な時間を過ごせた（写真 1、写真左より Joyce、和気、久保田、古谷野、Chavez、Chung 各先生方）。

会場を見渡すと韓国からの参加者に加え、フィリピンからの出席者が目立った。聞くと 50 人弱が大挙して参加したとのことであった。宴もたけなわで後半になると何故かカラオケ大会、さらに

デイスコを思わせる会場に変貌し、陽気で達者なフィリピン女医軍団が唄い踊りの大活躍であった（写真 2)。撮影した集合写真では 80 名余りの参加者がいたことが分かる（写真 3)。

（写真 2、会長招宴で踊るフィリピン参加者）

（写真 3、会長招宴後の集合写真）

翌日は 9 時から St. Mary Hospital という、病床数 3,000 を超えるソウルでも有数の巨大なカトリック大学の付属総合医療センターで学会が開催された（写真 4、St. Mary Hospital, Seoul）。

会場は地下 1 階のオーデイトリアウムを講演会場に（写真 5、メインホール）、その向かいの 2 部屋のパーテイッションを外した部屋を e-poster 会場と業者展示としたものだが、ホールは 300 席程度で、機材その他はよく整備されていた。

日曜開催の本大会では午前にまずレクチャーがなされ、Current Trends in TMD Treatment, Biopsychosocial Therapy for TMD, The time course of osteoarthrosis of the temporomandibular joint: Long-term MR assessment がそれぞれ韓国、フィリピン、日本（鶴見大学、小林馨教授）の幹事国からの招待講演者により行われた。参加国毎また地域の学術レベルは異なっており、多少の討論を通じて各国での（医療保険）診療の事情や歯科医療状況などの一端が分かった。あっという間に午前のセッションは終了し、センター内の別棟の職員大食堂に参加者は移動し、沢山の医療者に交じって典型的なお昼の韓定食を興味深く頂いた。

午後のポスターセッションには 21 題の演題がエントリーされており、日本からは 8 題出されていた。e-poster では前記会場の相対する双方の壁の前に 1 台ずつ縦長のポスター用の大きな液晶スクリーン機器が設置されており、その前で演者は PC 画面を扱うようにしてプレゼンを行うようになっていた。

（写真 6 、画面左上に見えるのが Seong Yong Moon 準備委員長）。

従来のポスター発表と比べて一長一短があり、画面は綺麗で、機種によっては画面タッチでスクロールや拡大も可能だが、参加者が講演の合間にポスターを見ようとすると PC を扱う要領で画面に出さないと見ることが出来ない。他の学会では 3 台くらい設置していたのでまだ良かったが、少ない機種しかないと やや不自由である。発表者にはデータは学会から送られてくるフォーマットにパワーポイントの要領で作成すれば良いので、ポスターを入れた筒を列車や飛行機内に持ち込まずに済む利点はあるが。ポスター賞が今回も設定されており、海外演題に 3 題（いずれもわが国から、京丹後市立久美浜病院の丸尾将太先生、鶴見大学の伊東宏和先生、杉崎正志特任教授）、韓国内からの演題に 2 題（Dong-Woo Kang at Seoul National Univ. Aaron Besana at Korea Univ. Medical Center）の受賞があった。

その後には韓国講師による 4 題のレクチャーと 2 題の歯科衛生士向けのレクチャーがあり、組織委員長に学会参加者総数を問い合わせると約 200 名とのことであった。

しかし日曜日の学会開催で午前には韓国内からの出席者の出足は鈍いようであり、一方わが国からの多くの出席者は、翌日が通常の月曜でもあり、午後にはフライト時間に応じて会場を後にせざるを得ず、折角の午後講演も聴講にはスケジュール的に難しいものがあった。

先に記述したように、第 6 回のアジア顎関節学会を 2019 年 7 月 27-28 日に　　東京において第 32 回日本顎関節学会総会・学術大会（大会長：日本大学松戸歯学部、近藤壽郎教授）と共に開催するので、2 年前のフィリピン大会と合わせ随分と参考になった。国別、地域別の医療事情、研究背景の差異があるので、講演についてはテーマを決めて企画するのが得策と思われ、一方教育セミナーなどのプログラムも必要と感じられた。先日 2019 年に学会場となる学術情報センター 一橋記念講堂に近藤教授ならびに準備委員の方々と下見に行き、早速いろいろの打ち合わせを始めている。とはいえ日本とりわけ東京での物価は半端ではなく高いので、懇親会などのソシアルプログラムに日本らしい配慮と企画をどうしたものか、楽しくもあり、悩ましいところでもある。

会員皆様のご参加とご協力を心よりお願い申し上げます。